

阿寒湖で見つけたイトクズモ (*Zannichellia palustris* L.) の切れも

神 谷 要

北海道霧多布湿原で開催された水草研究会の終了後(1998年8月10日)、飛行機待ちの時間を利用して阿寒湖へ立ち寄った。ここで、採集した切れもが汽水性の水草イトクズモ (*Zannichellia palustris* L.) であったので報告する。阿寒湖は標高420mの火山堰止湖で、湖岸や流入河川の周辺では多くの温泉が湧出している。阿寒湖の水草については國井・吉田(1988)がリュウノヒゲモ、イバラモ、センニンモなど22種を報告しているが、イトクズモの記載はなかった。

イトクズモは世界に広く分布する汽水性の水草であり、一般に海洋沿岸部の湖沼や河口域に出現するが(角野, 1994)、実験室レベルでは淡水中でも光合成を行い発芽・成長することが知られている(辻・國井, 1998)。

今回発見したイトクズモは、阿寒湖南岸ビジターセンター近くの観光船が発着している桟橋で何気なく拾った水草(クロモ・マツモ・ホザキノフサモ)の切れもの中にあった。このような山の中でイトクズモがあることに疑問を感じ、同行の安藤義範氏にも確認したが、特徴的な三日月型の果実から間違いなくイトクズモであるとのことであった。最初は、自分たちの衣服に付着していたのではないかと考えたが、いくつか打ち上げられている水草を拾ってみるとやはりイトクズモを含んでいた。

後日、この切れもを島根大学汽水域研究センターの國井秀伸先生に同定していただいたところ、やはりイトクズモに間違いなく、しかも阿寒湖では未記載の種ではないかとのコメントをいただき、会報への寄稿を勧められた。また、阿寒湖には汽水域を好みリュウノヒゲモが多産していることから、阿寒湖の水質が温泉の影響により高い電気伝導度を保ち、内陸ではあるがイトクズモが生育していても不思議ではないとのコメントもいただいた。この後、阿寒町教育委員会に問い合わせたところ、阿寒湖の水質は温泉水により電気伝導度(200 μ S/m)が高く、場所によっては汽水のような水環境になっていることがわかった(若菜, 1998)。さらに、阿寒湖では汽水性の藻類であるオオイシソウの自生が確認されている(新井ら, 1996)。

これらのことから、阿寒湖は温泉水により汽水のよう

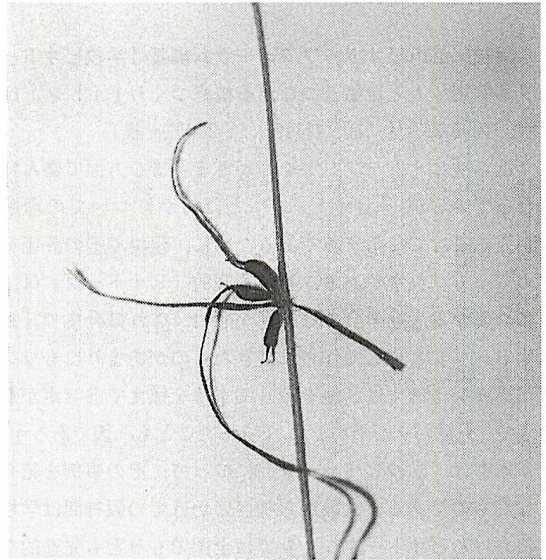


図1 阿寒湖で採集した切れも(イトクズモ)の果実

な環境となっており、そのために阿寒湖もしくはその周辺の河川にイトクズモが生育していたのではないかと想像された。道内には阿寒湖の他にも温泉水の流れ込む内陸の湖沼や河川が多数存在する。そこにイトクズモをはじめとする汽水性の水草が自生している可能性は大いにあると考えられるので(國井, 1994, 1995)今後ぜひとも道内の研究者によりイトクズモの自生地を確認していただきたいと考えている。

本標本は、國井・吉田(1988)の標本と合わせて島根大学汽水域研究センターに保管した。

参考文献

- 新井章吾・佐野修・若菜勇, 1996. 阿寒湖におけるオオイシソウの発見について。マリモ研究(阿寒町教育委員会) 5: 12-15.
- 國井秀伸, 1994. イトクズモ発見記。水草研究会会報 54: 38.
- 國井秀伸, 1995. 汽水域における水生植物の多様性について。日本海学会誌 49: 136-139.
- 國井秀伸・吉田忠生, 1988. 阿寒湖の水生植物。昭和63

年度阿寒湖のマリモ調査報告, マリモ調査研究
会 p. 1-12.

角野康郎, 1994. 日本水草図鑑. 179 p. 文一総合出版.
辻 和弘・國井秀伸, 1998. 危急種イトクズモの成長と

光合成特性. ラグナ (汽水域研究) 5: 225-231.

若菜 勇, 1998. 高塩濃度下におけるマリモの糸状体の
成長および光合成速度の高進. マリモ研究 (阿
寒町教育委員会) 3: 51-58.

○阪神・都市ビオトープフォーラム編著『学校ビオト
ープ事例集一人・自然とつながる校庭づくり』(トンボ出
版, 1999年3月, B5判119p, 1,200円+税)

近年「ビオトープ」づくりがさまざまな方面で盛んにな
っているが、「ビオトープ」とは何かについての理解
が人によってまちまちであるために、現場やその評価を
めぐっては混乱がある。特に箱庭的「ビオトープ」は、
私の属する生態学会では評判が悪い。これは今まで「ビ
オトープ」と称して作られてきたものがあまりにもワン
パターン (例えば「池を掘って水草を植えてトンボが飛
んでくればパチパチパチ」) であったことも一因であろう。

本書は「学校ビオトープ」に絞って、その事例を紹介
したものである。大阪から神戸にかけての阪神間は学校
におけるビオトープづくりでは全国でもっとも先進的な
地域のひとつで、特に震災による大きな被害の後には行政
もバックアップしてさまざまな取り組みが始まっている。
その中から25校の事例を紹介したものだが、出来上がった
姿ではなく、どのようなきっかけによってビオトープ
づくりが始まり、完成までにどのような苦労があったの
か、そしてビオトープと接して子供たちがどのように変
わろうとしているのか、などが報告されている。後半に
は、「学校ビオトープを考える」と題する座談会と、ビ
オトープづくりの具体的な準備と技術についてまとめた
ある。

しっかりと目標を考えて工夫した「ビオトープ」と流
行便乗型の安直「ビオトープ」の玉石混淆の状態は今し
ばらく続くであろう。本書は「学校ビオトープ」という
限られた範囲の中ではあるが、現在の到達点のひとつを
示している。

「ビオトープ」でしか自然とふれ合えないという状況
が田舎育ちの私にはもどかしいが、「学校ビオトープ」
で生きものに親しんだ子供たちが、次は野外に出て本来
の自然の成り立ちや、それがおかれている状況を学ぶ道
筋が準備されるのであれば、環境教育の場としての位置
づけはさらに確固たるものになるだろう。

(角 野 康 郎)

○汽水域研究グループ (代表 國井秀伸) 編『中海本庄
工区の生物と自然』(たたら書房, 1999年3月, A5判
102p, 1,000円 (税込み))

計画決定以後、長い期間が過ぎても完成しない大規模
公共事業を見直す動きが始まっている。諫早湾のように
強行された例もあれば中止の結論に至った事業もあるな
ど現実にはさまざまであるが、島根県と鳥取県にまたがる
汽水湖である中海も、干拓の是非をめぐって揺れている
場所である。

昭和38年に開始された「国営中海土地改良事業」は、
住民の反対で延期されていたが、再開の動きが急を告げ
ている。しかし、十分な環境アセスメントさえなしに工
事が再開されることに疑問をもった地元の研究者グル
ープが、工事予定地の本庄工区を中心に環境と生物に関
する自主的な調査を行い、多くの人にその結果を知って
もらおうと出版されたのが本書である。

地形・地質、人工衛星からみたプランクトンの発生状
況、動植物プランクトン、海藻、ベントス、魚類、水鳥
などの調査結果が、多くの図や写真を使って平易にまと
めてある。水草に関しては「海藻」の章で触れられ、調
査区域内にはカワツルモとコアマモの生育が記録されて
いる。

本書は、あくまで中海の自然を科学者として調査し、
そのありのままの姿を紹介するにとどまっており、はじ
めから干拓に反対する立場でまとめられてはいないこと
も付記しておいたほうがよいだろう。判断は地元住民が
下すべきという考え方であろうか。

工事の行方は、農水省と島根県によって新たに設けら
れた「本庄工区検討委員会」の結論にゆだねられること
になったというが、本調査で明らかにされた中海の生物
多様性を損なってまで、なぜ干拓事業を進めなければな
らないのかについて、中味のある議論が期待される。

(角 野 康 郎)